

ちんちん電車に乗って、住吉さんから堺の街を歩く (大阪)

「早過ぎる菜種梅雨」と気象予報士さんが嘆いた時期外れの雨模様の日々。
当日は幸いにも前線が南に下がって、雨は明け方までにあがり、昼には日差しも出て、
風もなく、ハイキング日和になりました。「晴れる燦歩会」のレジェンドは健在です。

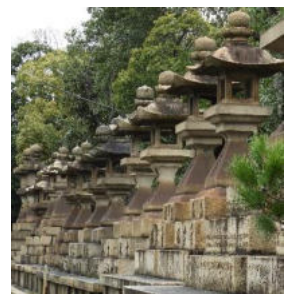
1月の例会は恒例の初詣、今年は住吉大社(大阪市住吉区住吉)にお参りします。
南海電車南海線「住吉大社」駅に10時集合。この近くで生まれ育ったというビジター1名を
加えて、参加は26名。いつもより一寸多めです。(男性16名、女性10名)

駅から続く参道を進んで大鳥居をくぐり、住吉さんのシンボル
太鼓橋(反り橋)を渡ります。まるで水車の上を歩くような
急勾配で、渡るというよりは、登って降りる感じです。
前夜の雨で湿った橋板を慎重に踏みしめて進みます。
この日最も急な登りと下りでした。



住吉さんには神様が4柱祀られていて本殿も4棟あります。1枚の写真には収まりません。
左写真で左端に写っているのが「第二本宮」、中央が「第三」、右端が「第四」です。
順にお参りして燦歩の安全を祈りました。重厚な屋根を持つ白壁朱塗りの本殿の直線的な造形
に対して、前に立つ拝殿は柔らかな佇まいです。「住吉造り」と呼ばれる独特の社殿は国宝に
指定されています。江戸時代1810(文化7)年の建築ですから、国宝としては新しい方
ですね。式年造替のしきたりで古い形をそのまま受け継いで作り直されて来たので、古式を
良く残しているという事で、国宝になっているのだそうです。

住吉神社は、海上の安全をつかさどる神として、古くから信仰され、
遣唐使の船にも祀られたそうです。海運が発達し大坂が天下の台所になった
近世には、全国の廻船業者の崇敬を集め、各地に住吉神社が祀られました。
その数は2千社を超えと言われています。
参道から境内にかけて、全国から奉納された大きな石灯籠が林立しています。
600基を超えとか。詳しくは補足・蛇足に譲って先を急ぎます。



太鼓橋を背に全員写真です。お粗末な事に三脚を忘れたので、私の顔は後で入れました。



境内を出て門前の通りを走るちんちん電車に乗ります。電車の正式の名を阪堺電気軌道と云いますが、通称は「阪堺電車（はんかいでんしゃ）」です。北は大阪恵美須町と天王寺駅前を発し、住吉で合流、大和川を渡って堺の町を抜け、浜寺駅前に至ります。

前身は1897（明治30）年創業の大阪馬車鉄道で、現在の路線は合わせて18.5km。最高速度40kmと云いますから、きわめて等身大の電車と云えるでしょう。駅の間隔は平均500m足らず、特に住吉停車場と住吉鳥居前停車場の間は200mしかありません。

1日の乗降客はおよそ2万7千人、まさに生活の足ですね。

私たちは「住吉鳥居前」から「寺地町」まで、およそ20分の旅を楽しみました。様々な色と形の車両が走っていました。



燦歩会の別名は「買い出し燦歩会」。「かん袋」という不思議な名前の菓子店に寄ります。創業はなんと鎌倉時代末期1329（元徳元）年とか。和泉屋と称していましたが、豊臣秀吉の時代、店主が伏見城の普請の奉仕に出た時の事です。持ち前の力で瓦を屋根に投げ上げる様が、あたかも紙袋が風に舞うのに似ていたのを、秀吉が讚えて、「かん袋」という店の名を与えたという事です。

名物は「くるみ餅」、と云っても「クルミ」が入っている訳ではなく、

白玉団子を青大豆の餡でくるむので、「くるみ」餅なのです。甘みは貿易港堺らしくルソン伝来の砂糖を使っていたそうです。純白の白玉はもちもちとした歯応えと柔らかさ、餡は艶のある緑色、なめらかで爽やかな味わいです。餡の中に黒く見えるのは、大豆の栄養豊富な胚芽でしょう。帰宅後おいしくいただきました。





電車通りを渡って千利休の屋敷跡を訪ねます。
堺の豪商の家に生まれ、武野紹鷗らに師事した千利休は、織田信長、豊臣秀吉に茶頭として仕え、わび茶を大成します。

この屋敷跡には、利休が椿の炭を底に沈めていたという椿の井戸が残っています。

堺は歌人与謝野晶子の生まれた街でもあります。昼食後、近くの「利晶の杜（りしょうのもり）」を訪ねました。まことに凝ったネーミングですね。利休の「利」と、与謝野晶子の「晶」、二人ゆかりの資料が展示されているのです。1階には南蛮船の大きな模型（写真中）2階には晶子の生家「駿河屋」菓子店の模様（写真右）が再現されていました。



この日は、利晶の杜を見学して、解散しました。

* * * * *

いつもながらの蛇足・補足で失礼します。

高灯籠（たかとうろう）、住吉名勝図会の事

住吉大社の参道に、特大の燈籠があります。高さ21mの「高灯籠」です。元は鎌倉時代に問丸と呼ばれる海運業者たちが寄進したもので、日本最古の灯台とも云われています。高灯籠は、江戸時代の「住吉名勝図会」にはこんな風に描かれています。石垣の上に太い柱を組み合わせて立てているようですね。右方向が海、橋を渡って左に行けば、すぐ住吉さんです。埋め立てで海岸は遠くなってしまいましたが、高灯籠は元々の場所近くに復元されています。

たびたびお世話になる江戸時代の名所図会。寺社参詣、観光旅行がブームになり、そのための案内書が多く刊行されます。國史大辞典では31例を挙げていますが、「住吉名勝図会」はそのごく初期1794（寛政6）年に刊行されています。住吉神社だけの案内書



5巻5冊です。由緒来歴、年中行事、大阪市中から住吉までの道案内などなど、微に入り細に亘って案内しています。それだけニーズが大きかったのでしょう。蛇足を重ねれば、あの弥次喜多のお二人も住吉さんにお参りし、門前の料亭「三文字屋」でご馳走になっていますね。

奉納された石灯籠の事

全国各地から、また様々な業種の組合から、石灯籠が奉納されています。
大鳥居の左にはひときわ大きく「うつぼ」「干鰯(ほしか) 仲間」の燈籠がありました。
高さ8mだそうです。「うつぼ」は今の大阪の靱公園辺り。「ほしか」は、油脂を搾り取った後のイワシを干したもので、乾燥肥料として農業に使われました。大阪南部の泉州木綿の生産に大きな役割を果たし、その歴史は今もタオル産業などに受け継がれていますね。



「筑前廻船中」とあるのは、福岡辺りの廻船業者の組合でしょう。

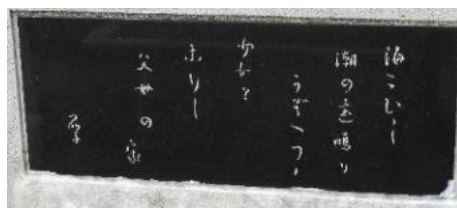


こちらは大阪の「塗師仲間(ぬしなかま)」漆塗りなどを業としていた人々でしょう。
次、西横堀は読めますが、その下が難読ですね。「布海苔仲間(ふのりなかま)」でしょうか。「ふのり」は主に着物の洗張りで布の糊付けに使われていましたね。私も母がどろどろに煮たフノリの汁に反物を漬け、板に張っていたのを思い出します。西横堀に問屋さんの組合があったのでしょうか。大阪のこの辺りで海産物が盛んに商われていたのでしょうか。テレビドラマの名作『横堀川』も思い出されます。そしてもう一つ、「ざこば」とは主に生魚を扱っていた「雑喉場(ざこば)市場」の商人たちからのもので、文化9年とありました。(1812年)

与謝野晶子の生家の事

晶子の生家もすぐ近くなので、帰途に立ち寄りました。チンチン電車が走る大通りに面しています。歌碑には晶子の書で、

「海こひし 潮の遠鳴りかぞへつつ 少女となりし 父母の家」と刻まれていました。



ご 案 内

旧友会員の方、職員の方、入会大歓迎です。

入念な下見を行い、中途離脱も可能なルートを設定して、**毎月第4日曜日**に歩いています。
メンバーはおよそ50名、その日の都合と体調に合わせて自由参加です。

(事前に予約が必要な場合もあります)

今後の予定は

2月23日(日) 西行入寂の弘川寺と富田林寺内町を散策(大阪)

3月22日(日) 華岡青洲の里と粉河寺を訪ねる(和歌山) *青春18切符利用

来年度の予定は、間もなく決まります。

参加ご希望の方は、会務担当山村恵一にご連絡下さい。(電話090-1484-4403)

ご一緒に気軽に楽しく歩きましょう。

(写真・文 生島 幸弥)